

文中における前置詞句の機能効果

村 山 雅 夫

Importance of Prepositional Phrases in Sentences

Masao Murayama

要約

元来、言語は、ラテン語、ドイツ語のように屈折言語であったが、近代英語では、語順や前置詞などに完全に依存する分析言語へと変化した。近代英語では、語順は言うまでもなく、前置詞の機能は文形成上欠くことの出来ないものである。作品 *Sir Gawain and the Green Knight* をテキストとして、前置詞句を分類し、それが文中でどう機能しているかを調査・研究したものである。

Key word

文、前置詞句、機能語

前置詞を日本語で「ある語の前に置かれる語」といっても何の意味がよくわからない。つまり、前置詞独自では意味を有しない、ということである。ところが前置詞を名詞、代名詞または名詞相当語句を目的語にし、形容詞句、副詞句を構成する語、と定義すると多少事情が変わってくる。

元来、英語は文法関係を伝えるのに、語順や機能よりも屈折に完全に依存する言語、いわゆる屈折言語であった。今日では、それが語順や前置詞に依存する分析言語へと変化した。近代英語においては、語順が確立し、極めてわかりやすい言語となっている。

文を構成する主要な成分は主として名詞、動詞、形容詞である。フリーズの用語を借用すれば、それは内容語に相当するものである。内容語だけでは文は書けないわけではないが、文をより正確に、より詳細に描写したり、表現するにはそれだけでは十分であるとはいえない。この不十分さを解消してくれるのが機能語の存在である。文を構成する上での核にはなりえないが、常に脇役に徹し、内容語に光をあて、際立たせてくれるのが機能語である。機能語は文法上機能するだけで独自では何の機能もないし、何の意味も有しない。機能語には前置詞以外に接続詞、助動詞、冠語などが含まれる。この小論では、中世英語の代表作といわれる *Sir Gawain and the Green Knight* から前置詞句に相当するものをすべて抜き出し、それらを分類・分析し、前置詞句が文中でどう機能しているかを探る。

I 前置詞句が副詞的機能をするもの

1. with(wyth) + 名詞

この例は 287 例を数える。その中には with、wyth の綴字の違いについては触れないことにする。with は古代英語の(1) *mid*、(2) *wiþ* に由来する。(1)の例として、*Be þe first cors come with crakyng of trumpes* や *Gawan gotz to þe gome with giserne in honde* に見られるように with、having、among の意味で用いられている例が多いが、*With gret bobblounce þat burze he bigez vpon fyrst* や *with much reuel and ryche of þe Rounde Table* の例に見られるように in、amid の意味に用いられているものもあるし、また、*þat were enbrawdred and*

beten wyth þe best gemmes や Hadet wyth an aluisch mon, for angardez pryde の例に見られるように by, through の意味に用いられている例もある。(2)の例としては、Preue for to play wyth in oþer pure laykez や To daly with derely your daynte' wordez の例に見られるように with, against の意味で用いられている例が多いが、Whettez his whyte tuschez; with hym þen in irked や Wyth what weppen so þou wylt…の例のように at, from の意味で用いられている例もある。

2. in + 名詞

この例は 261 例を数える。in は古代英語の in に由来する。この例の中では、3e schal lenge in your lofte, and lyze in your ese や Bot in syngne of surfet I schal se hit ofte の例に見られるように in, on, at の意味で用いられている例が多いが、In menyng of manerez mere…や Bot 3e he sayde in hymself, 'More semly hit were…の例に見られるように in(to)、within の意味で用いられている例もある。

3. to + 名詞

この例は 158 例を数える。to は古代英語の tō に由来する。Fro riche Romulus to Rome ricchis hym swyþe や Techez hym to þe tayles of ful tayt bestes の例に見られるように to の意味で用いられている例が多いが、Be borz brittened and brent to brondez and askez の例のように into の意味に、Haled to hym of her arewez, hitten hym oft の例のように at の意味に、Tapitez tyzt to þe woze of tuly and tars の例のように on(to) の意味に、Wyze þat is so wel wrast alway to god の例のように towards の意味に、Driuande to þe heze dece, dut he no woþe の例のように to, as far as の意味に、Bot I am boun to þe bur barely to-morne の例のように for の意味で用いられている例もある。

4. { (1) on + 名詞 (2) vpon + 名詞

(1)の例は 93 例を数える。on は古代英語の on に由来する。Watz tried for his tricherie, þe trewest or erth の例に見られるように (up) on の意味で用いられている例が多いが、A kenet kryes þerof, þe hunt on hym calles の例のように to の意味に、As alle þe clamberande clyffes hade clatered on hepes の例のように (in) to の意味に、Hit hade a hole on þe ende and on ayþer syde の例のように at の意味に、Now “brid tyme þrowe best” þenk on þe morne の例に見られるように in の意味に用いられている例もある。

(2)の例は 68 例を数える。vpon は on の同義語であるが、古代英語の upp-on に由来する。Vmbeweued þat wyz vpon wlonk stufte の例に見られるように upon、on の意味に用いられている例が多いが、他に、knit vpon hir kyrtel vnder þe clere mamtyle の例のように over の意味に、And þaz þe glyterande golde glent vpon endez の例のように at の意味に、þenne a wyze þat watz wys vpon wocraftes の例のように in の意味に、As al were slypped vpon slepe so slaked hor lotez の例のように into の意味に、Mynned merthe to be made vpon mony sybez の例のように at, in, on の意味に、Dere dyn vpon day, daunsyng on nyztes の例のように by の意味に、用いられるものもある。

5. bi(by) + 名詞

この例は116例を数える。bi(by)は古代英語の *bī* に由来する。Ande quen þis Bretayn watz bigged bi þis burn ryche の例のように *by* の意味に、Bi contray caryes þis knyzt, tyl krystmasse euen, al one の例のように *over* の意味に、þer tournayed tulkes by tymeþ ful mony の例のように *on* の意味に、Alle þe burnez so bolde þat hym by stoden の例のように *near* の意味に、With þe barbe of þe bitte bi þe bare nek の例のように *towards* の意味に、用いられている例が多い。

6. at(e) + 名詞

この例は114例を数える。at(e)は古代英語の *æt* に由来する。And þat hatz wayned me hider, iwyis, at þis tyme の例のように *at* の意味で用いられている例が多く、他に、Bi vche grome at his olegre grayþely watz serued の例のように *according to* の意味に、þat alle his forsness he feng at þe fyue joyez の例のように *of, from* の意味に、Of þe chaunce of þe grene chapel at cheuarous knyztz の例のように *with* の意味に用いられているものもある。

7. for + 名詞

この例は114例を数える。forは古代英語の *for* に由来する。For alle þe lufez vpon lyue layne not þe soþe for gile の例のように *for (sake, purpose of)* の意味に用いられている例が多いが、þat euerze fondet to fle for freke þat I wyst の例のように *because of, through* の意味で用いられる例も多い。他に、Lede, lif for lyf, leue vchon oper の例のように (*in return, exchange*) *for* の意味に、For he myzt not be slayn for slyzt vpon erþe の例のように *in spite of* の意味に、Long sythen fro þe sounder þat sized for olde の例のように *because of* の意味に用いられている例もある。

8. of + 名詞

この例は74例を数える。ofは古代英語の *of* に由来する。ofはいろいろな意味で用いられている。中でも þat he beknew cortaysly of þe court þat he were の例のように *from, out of* の意味で、Dayntés dryuen þerwyth of ful dere metes の例のように (*consisting, made*) *of* の意味に、þat euer glemered and glent al of grene stonnes の例のように *by, with* の意味に、Oper sum segg hym bisozt of sum siker knyzt の例のように *for* の意味に用いられている例が多く見られるが、これ以外に He watz so joly of his joyfnes の例のように *in, as regards* の意味に用いられているものもあるし、And ay þe lorde of þe londe is lent on his gamnez の例のように *in, on* の意味で用いられている例もある。

9. $\left\{ \begin{array}{l} (1) \text{ fro} \\ (2) \text{ from} \end{array} \right.$

(1)の例は27例を数える。froは古代英語の *frá* に由来し、現在は用いられていない。Bid me boze fro þis benche; blod brayd froþe body の例に見られるように *away from, from* の意味で用いられている。

(2)の例は1例のみである。fromは古代英語の *fram* に由来する。from queþen he watz

wonnen の例のように from の意味に用いられている。

10. bifor(n)e (byfor(n)e) + 名詞

この例は 25 例を数える。bifor(n)e は古代英語の be-foran に由来する。longe bifore pryme; kneled … bifore þe kyng; He fonde a foo hym byfore の例に見られるように、before, in front, ahead, in presence of の意味に用いられている例が大部分だが、þer schulde no freke vpon folde bifore yow be chosen の例のように in preference to の意味に用いられている例もある。

11. þurȝ + 名詞

この例は 24 例を数える。þurȝ は現在は用いられず、through が用いられているが、古代英語の þurh に由来する。Ridez þurȝ þe roze bonk ryȝt to þe dale の例のように through(out), over の意味で用いられている例が多いが、So did hit þere on þat day þurȝ dayntés mony の例のように for, because by (means of) の意味で用いられている例も多く見られる。

12. ouer + 名詞

この例は 18 例を数える。ouer は古代英語の ofer に由来する。Holdez heze ouer his hede の例のように above の意味で用いられている例が多い。A much berd as a busk ouer his brest henges の例のように over の意味に用いられる例も多い。また、And fer ouer þe French flod Felix Brutus の例のように over, aross の意味で用いられている例も多い。

13. into + 名詞

この例は 13 例を数える。into は古代英語の inn tō に由来する。he nezed ful neghe into þe Norþe Walez; broȝt … into boure … ; steppez … into stirop の例に見られるように現代英語の into の意味と何ら変わらない。

14. Vnder + 名詞

この例は 13 例を数える。vnder は古代英語の under に由来する。knit vpon hir kyrtel vnder þe clere mantyle の例のように under の意味で用いられている例が多いが、Stifest vnder stel-gere on stedes to ryde の例に見られるように in (clothes) の意味で用いられている例もある。

15. among + 名詞

この例は 10 例のみである。among は古代英語の on mong に由来する。Vncoupled among þo þornez; he mace hym as mery among þe fre ladyes の例のように現代英語の among (…の間に) の意味で用いられている。

16. withoute(n) (wythoute(n)) + 名詞

この例は 10 例のみである。この語は古代英語の wiþutan に由来する。withouten ende at any noke I oquere fynde; dos … withouten dyn more; I wythoute vylanye myȝt voyde þis table の例に見られるように現代英語の意味と変わらない。

17. after + 名詞

この例も 10 例のみである。この語は古代英語の *æfter* に由来する。Vche sesoun serlepes sued after oþer の例に見られるように *after*, *behind*, *in pursuit of* の意味で用いられるものが多い。For I zelde me zederly, and zeze after grace の例のように *for* の意味で用いられている例もあるし、And so after þe halme halched ful ofte の例のように *along* の意味で用いられている例も見られる。

18. bitwene (bytwene) + 名詞

この例は 8 例のみである。この語は古代英語の *be-twēon (an)* に由来する。Gret perile bitwene hem stod; Þer watz stabled a steuen vus bytwene の例に見られるように現代英語の *between* の意味に用いられている。

19. aboute + 名詞

この例は 9 例のみである。この語は古代英語の *abūtan* に由来する。Here myzt aboute mydnyzt の例のように、*about*, *around* の意味で用いられているのが大部分である。Debated busily aboute þo giftes の例のように *concerning* の意味で用いられている例が 1 例見られる。

20. withinne (wythinne) + 名詞

この例は 7 例のみである。この語は古代英語の *wipinnan* に由来する。Ho comez withinne þe chambre dore; whyle þay westen wel wythinne hem hit were の例に見られるように現代英語の *within* の意味で用いられている。

21. bisyde (bysyde) + 名詞

この例は 6 例のみである。この語は古代英語の *be sidan* に由来する。And euer oure luflych knyzt þe lady bisyde; Ledede hym to his awen chambre, þe chymme bysyde の例に見られるように現代英語の *beside* の意味に用いられている。

22. toward (e) + 名詞

この例は 3 例のみである。towarde は古代英語の *tōweard*, *tō hir weard* に由来する。Toward þe derrest on þe dece he dressez þe face; Þen he wakenede, and wroth, and to hir warde torned の例に見られるように現代英語の *toward (s)* の意味に用いられている。

23. abof + 名詞

この例は 3 例のみである。abof は古代英語の *abufan* に由来する。And hit watz don abof þe dece on doser to henge; Abof a launde, on a lawe, loken vnder bogez の例に見られるように現代英語の *above* の意味に用いられている。

24. vmbe + 名詞

この例も 3 例のみである。with silk sayn vmbe his sycle; swyþe sweþled vmbe swange swetely þat knyzt の例に見られるように、*about*, *round* の意味に用いられている。

Ⅱ 前置詞句が形容詞的機能をするもの

1. of + 名詞

この例は 223 例を数える。ほとんどの例が *At þe fyrst quethe of þe quest quaked þe wyld;* *And al þe wele of þe worlde were in my honde* のように、「…の」の意味で用いられている例が大部分であるが、*of sum auenturus þyng an vncouþe tale* のように、*about, concerning* の意味で用いられている例もあるし、*And an outrage awenture of Arthurez wonderez; ledez of þe best …* のように、*from, among* の意味で用いられている例もある。

2. in + 名詞

この例は 20 例を数える。ほとんどの例が *Welneze of al þe wele in þe west iles;* *And alle þe men in þat mote …* のように、「…における」の意味で「場所、位置を示す」*in* で用いられている。

3. on (vpon) + 名詞

この例は 18 例を数える。*For to mete wyth menske þe mon on þe flor;* *Bot þe lorde on a lyzt horce launces hym after* の例に見られるように、「…の上に、…に接して」の意味で用いられている例が大部分である。

4. with + 名詞

この例は 2 例のみである。*þe wyld watz war of þe wyze with weppen in honde* のように、「…を持っている、…がついている」の意味で用いられている。

5. at + 名詞

この例は 1 例のみである。*What! hit wharred and whetle, as water at a mulne* のように、「場所の一点を示す」の意味で用いられている。

6. bi + 名詞

これも 1 例のみである。*Of mony borelych bole aboute bi þe diches* の例のように、「…のそばの、…の近くの」の意味で用いられている。

Ⅲ

I、II から言えることは、副詞句の使用回数が形容詞句と比較して圧倒的に多いということである。全体の 85 パーセントを占め、形容詞句の使用は 15 パーセントを占めるにすぎない。副詞句の中で一番使用されているのは *with* + 名詞で 287 例で 20 パーセント、次に *in* + 名詞の 261 例で 18 パーセント、*on (vpon)* + 名詞の 161 例で 11 パーセント、*to* + 名詞の 158 例で 11 パーセント、*by* + 名詞の 116 例で 8 パーセント、*at* + 名詞の 114 例で 8 パーセント、*for* + 名詞の 102 例で 7 パーセント、*of* + 名詞の 74 例で 5 パーセントと続く。一方、形容詞句の中ではほとんどが *of* + 名詞が 221 例で 84 パーセントを占め、*in* + 名詞の 8 パーセント、*on (vpon)* + 名詞の 7 パーセントと続く。

作品、Sir Gawain and the Green Knight は 2530 行から成る。前置詞句使用回数 1705 から考えると、ほとんどの文の中で前置詞句が使用されていることになる。文の主要な構成要素は名詞、動詞、形容詞であるが、それだけでは十分でない場合が多いという証である。形容詞句は名詞と関わりを持つ。名詞は主語、補語、目的語になりうる。主語は「……は」、目的語は「……を」の中での名詞との関わりで形容詞句が使用されるので「……の」に相当する「of」が多く使用されることは理解できる。一方、副詞句の場合は、動詞との関わりをもつが、「……する」、「……した」だけで修飾語がなくとも文が完成する場合もあるが、大般はそうではない。すべてが内容語だけで文が完成するのならこれほど楽なものはない。ただ「……する」、「……した」よりもどのように何をどうするか、何をどうしたのかの部分が表現されると、文が豊かになり、相手にわかりやすく伝わる。副詞句が形容詞句より使用回数が多いということは、主語、補語、目的語の機能をする名詞よりも、文形成上、副詞句が動詞との関わりが多いといえる。ただ「東京に行った」という内容語だけの表現よりもだれと、何で、何のために東京に行ったのかがあった方が文が具体的になりわかりやすい。したがって、形容詞句よりも副詞句の使用回数が多いのは当然といえる。

内容語は自立出来るが、機能語は自立出来ない。文の核にはなりえないが、なくてはならないものである。機能語である前置詞は名詞と関わり、前置詞句を形成し、それが形容詞句であれば名詞を修飾し名詞をより具体的に表現し、副詞句であれば動詞を修飾し動詞をより美しく飾る役割をしてくれる。前置詞句は文の中で大きな機能をしていることになる。城の石垣は大きな石だけでは、石垣は築けない。機能語に相当する砂、細石、セメントなどが重要な機能をしているはずである。人間社会においてもしかりである。内容語に相当する人間だけでは社会は成り立たない。機能語に相当する人間がいて初めて社会が形成されているはずである。

文の仕組みは社会の仕組み、団体スポーツの仕組みにもあてはまる。それぞれの構成要素、構成員が果たすべき役割をわきまえないで行動すれば、文も社会もチームワークも成り立たない。内容語が機能語の役を演じたり、機能語が内容語の役を演じたりするようなことがあると、当然文にはなりえないし、社会も乱れ困難に陥ることになる。チームはまとまるわけがない。内容語は内容語としての役を演じ、機能語は機能語としての役を演じて初めて文も成立し、社会も成立し、チームワークがとれることになる。この点から、前置詞句の機能は、文形成上、大きな働きをすることになる。

IV 前置詞句多く用いられている箇所

- (a) At þe fyrst quethe of þe quest quaked þe wyldre ;
 Der drof in þe dale, doted for drede,
 Hized to þe hyze, bot heterly þay were
 Restayed with þe atabyle, þat atoutly ascryed.
 Þay let þe herttez haf þe gate, with þe hyze hedes,
 Þe breme bukkez also with hor brode paumez ;
 For þe lorde hade defende in fermysoun tyme
 Þat þe sohulde no mon meue to þe male dere.
 Þe hindez were halden in with hay ! and war !

Pe does dryuen with gret dyn to þe depe sladez ;
 Per myzt mon se, as þay alypte, slentyng of arwes —
 At vche wende vnder wande wrapped a flone —
 Pat bigly bote on þe broun with ful brode hedez.
 And ay rachches in a res radly hem folzes,
 Hunterez wyth hyze horne hasted hem after.
 Wyth such a crakkande kry as klyffes haden brusten.

狩師たちが鹿狩をしている場面でその様子が目に浮かんでくるほど見事に細やかに描かれている。前置詞句が文の中で生かされている箇所である。

- (b) ‘Bot your gordel’ , quop Gawayn, ‘God yow forzelde !
 Pat wyl welde wyth guod wylle, not for þe wynne golde,
 Ne þe saynt, ne þe silk, ne þe syde pendaundes,
 For wele ne for worchyp, ne for þe wlonk werkkez,
 Bot in syngne of my surfet I schal se hit ofte,
 When I ride in renown, remorde to my seluen.
 Pe faut and þe fayntyse of þe flesche crabbed,
 How tender hit is to entyse teches of fylþe ;
 And þus, quen pryde schal me pryk for prowes of armes,
 Pe loke to þis luf-lace schal leþe my hert.
 Bot on I wolde yow pray, displese yow neuer :
 Syn ze be lorde of þe zonder londe þer I haf lent inne
 Wyth yow wyth worschyp — þe wyze hit yow zelde
 Pat vphaldez þe heuen and on hyz sittez —
 How morne ze yowre ryzt nome, and þenne no more ?
 ‘Pat schal I telle þe trwly,’ quop þat oþer þenne,
 ‘Bertilak de Hautdesert I hat in þis londe.

ガウエーンが身につけている帯は実は緑の騎士の帯ですべて妻を遣わして騎士がガウエーンに罪を犯かさせようと仕組んだたくらみであった。ガウエーンはこの帯を罪の印として何度も眺め、邪悪な肉体の弱点と脆さ、肉体が如何に汚辱に染まり易いかということ、など悔悟して心に銘じることに致しましょうとガウエーンが緑の騎士に誓う場面である。誤解のないように正確に伝えなければならないだけに形容詞や副詞だけでは表現出来ない部分を形容詞句、副詞句を巧みに用いて表現されている箇所である。

Texts

- (1) Sir Gawain and the Green Knight edited by J.R.R. Tolkien and Gordon
- (2) Sir Gawain and the Green Knight translated by Brian Stone.
- (3) Pearl and Sir Gawain and the Green Knight edited with an Introduction by A.C. Cawley, M.A., P.H.D.